

ま ほ う つ か  
魔法使いアルル②

は お り  
羽織かのん・作

か を る  
kaworu・絵



アルファポリスきずな文庫

## プロローグ

私の名前はアルル。今年で十歳になる女の子。ちよつぴり珍しい、黒い杖に選ばれた魔法使いなんだ。

私は生まれてすぐにお母さんが行方不明になってしまい、おじいさんのお屋敷に預けられ、下働きとして働いていた。

そこでいじめられていたところを、魔法使いであるアロンさんに助けってもらったの。アロンさんは、ひとりぼっちだった私のお父さんになってくれた。

お父さんは私たちが住むホープ王国の偉大なる大魔法使いで、とっても優しいんだ。

一人ぼっちだった私にできた初めての家族。私のことを大切に思ってくれる。私はそんな人に出会ったのは初めてで、家族ってこんなに温かいんだなって知ったの。

大好きな家族はあと三人いる。

まず、お父さんと一緒に住んでいるお屋敷の執事、名前はサリー。

うさぎのお顔をしていて、青い瞳がとってもきれい。それにサリーが作るご飯やお菓子は世界一つで思えるほどに美味しいよ。私はサリーのキャロットケーキが大好きなんだ。

そしてもう一人、私の親友で相棒のレオ。

本当の名前はレオナルドっていつて、ホープ王国の王子様なんだ。レオは私と同じ黒い杖に選ばれた魔法使いで、私と一緒にお父さんに魔法を教えてもらっている。

黒い杖に選ばれた魔法使いは、闇の魔力を使える者。

けれど、決して悪い魔法使いじゃないんだよ。

こわい闇に対抗することができるのは、光の魔力、そして私とレオが使える闇の魔力だけなんだ。

魔法使いには二種類いる。人を助ける魔法使いの「白い魔法使い」と——「黒い魔法使い」。

黒い魔法使いは、闇に魂を浸して闇に染まってしまった、魔法使いのなれの果て。

彼らは闇の王を求めていて、私やレオを狙っているみたい。

でも、私もレオもそんなものになるつもりはない。だって、みんなで一緒にお日様の下で遊んだほうが楽しいもの。

お日様の下で遊ぶのが大好きなのは、私だけじゃない。レオも、そしてもう一人の家族、私の友達で執事見習いのルビーもその一人。

ルビーは頭の上にぴよんっとウサギの耳が生えているんだ。元々は森にすむ「姿なき者」っていう存在のだけれど、言葉を話せるし、姿も変えられるの。前にルビーは男の子か女の子か尋ねたら、どちらにもなれるんだって。すごいよね。

お父さんの娘になつてからは、次々に起こる事件を魔法で解決しながら、家族みんなで幸せに過ごしていたんだけど、ある日、お父さんから私の本当のお母さんのことを教えてもらった。

お母さんは、魔法協会に勤める、とっても強い魔法使いなんだって。ずっと会っていないかったけれど、私が恐ろしい魔女ダリアに襲われた時に、お母さんが来てくれたんだ。

魔女ダリアはどうにかみんなで力を合わせて倒すことができたのだけれど、お母さんは魔女ダリアにかけられた「大切に思う人が近くにいと、相手にわざわいを呼ぶ」呪いのせいで、私とは一緒に暮らせず、また離れ離れになつてしまったんだ。

でも、私には家族がいるから大丈夫。

不安なこともあるけれど、私にはお父さんもサリーもレオもルビーもいる。

またいつかお母さんとも会つて、たくさん話したり遊んだりできたらいいなあって思っているんだ。

それに、私はこれからもたくさん冒険をしていくことが楽しみでたまらない。

魔法使いとして、私たちにはまだまだ知らないことがいっぱい。

だから、お父さんにいろいろと教えてもらいながら頑張るんだけど、うまくいかないこともたくさんあるんだ。

今だつてそう。

私たちは魔女ダリアが放つた魔女のゴーストたちを追つて、ドラゴニア山脈まで来ているの。

魔女ダリアを捕まえたことで、自由になった魔女のゴーストたちが悪さをしているんだって。

トラブルは次から次にやってくる！

でも私たちは頑張るわ。

だって偉大なる大魔法使いの弟子だもの！

## 第一章 人狼の里

ここは、ドラゴニア山脈。

私たちは、悪さをする魔女のゴーストたちを追いかけて、この雪山にやってきた。

雪道は、ごうごうと吹雪いていて、数メートル先さえも全然見えなかった。

体にかけてた守護魔法と防壁がなければ、ものの十分で凍えてしまう、つてお父さんが言っていた。

「レオ！ 雪がすごいね」

「うん。アルル、大丈夫？」

「もちろん大丈夫！」

守護魔法と防壁を張り続けるには、魔力をたくさん使う。

普通の魔法使いならすぐに魔力切れをおこすみたいだけど、私とレオは体の中に普通の魔法使いよりもたくさん魔力があるから大丈夫なんだつて。

雪は進むごとに深くなり始め、足が埋もれてしまう。

私とお父さんとレオはほうきを取り出すと、それにまたがった。

「キャハハハハハハハ！」

「ケケケケケケケ！」

ほうきで飛んでいると、突然、甲高い笑い声が聞こえ始めた。

魔女のゴーストたちだ。

するとお父さんが、いたずらっぽくニコツと笑い、私たちの方を見て言った。

「さあ、ゴーストたちが襲ってくるぞ！ だが、雪で前はまったく見えない！ そんな中でどう戦う？」

お父さんは簡単に正解は教えてくれない。

まずは自分たちで考えてやってみなさい、ということだ。

——ドーン！

——ギイイーン！

私たちに向かって、ゴーストたちはありとあらゆるところから攻撃を仕掛けてくる。

それを弾きながら、お父さんの問いかけに答えた。

「視界をまず晴らすことを一番に考える！」

「アルル、はずれじゃ。こんな大雪の中ではいくら晴らしたとて変わらぬ！ それに山の天気は変わりやすい」

「じゃあアロン先生！ 網を張るように全部の方向に攻撃を仕掛けるのはどうですか？」

「レオ、なるほどなあ。だがもし味方に当たったらどうするのじゃ！」

「攻撃が続く中、頭もフル回転にしなければならぬから大変！」

「私たちも必死だけれど、お父さんはそんなこと関係なしに「考えろ」って言うってくる。

「ほら考えるのじゃ！ このままではやられてしまうぞ！」

「攻撃してくる相手の姿が見えない状態。」

「ならどうすればいいのかを、私たちは一生懸命に考える。」

「あ！ 追跡をする！ 探知の魔法だ！」

「それに加えて、その探知したものを目視の魔法で、目で追えるようにするのはどうですか？」

「お父さんにはこやかに満足そうに笑った。」

「正解じゃ！ じゃが、この方法は、わしら三人にしかできないことを知っておけ。普通の魔法量では、いくつもの魔法を重ねる多重の魔法など使えず、そのまま負けてしまうぞ！」

「私たちはうなずくと、探知の魔法を使いゴーストの場所をとらえた。そしてさらに、目視の魔法をかけて、ゴーストたちに攻撃を仕掛けていく。」

「私たちの魔法はまだだ。お父さんの出す問題にもすぐに正解できない。けれど、前にお父さんが言ってくれた。」

「私たちは、頑張れば一流に、そしていずれお父さんにも勝てるくらい偉大な大魔法使いになるだろうって！」

「だからきつと、もつともつと強くなれるよね。」

「ドオオオオオン！」

「私は杖からたくさんの魔力を生み出し、ゴーストたちをなぎ払い続けた。」

「最後にもう一度、探知魔法で魔女のゴーストがいなくなると、私たちは山を降りた。」

攻略方法さえ分かればこんなに簡単にゴーストを倒すことができるのか、と思つたのだけれど、普通はできないんだよ、とレオに言われた。

私には「普通」っていうものがよく分からなかったけれど、とにかくゴーストを消すことができてほっとひと安心した。

この後は家に帰るのかな？ と思つていただけけれど、お父さんが予想外のことを言い出した。

「このままドラゴニル山脈を越えるぞ」

「お父さん、これからどこへいくの？」

お父さんは髭をなでながら言った。

「山脈の向こうには何があると思うかの？」

私より先に手をあげたレオが答えた。

「人狼たちの住まう地がある、と授業では習いました」

その言葉にお父さんはうなずくと、山を指さした。

「ドラゴニア山脈を越えたところに古い友人がいる。その友人に会いに行くとしよう」

「お父さんの友達がいるの？」

「ああ、そうじゃ」

レオはその言葉に不安げに顔を曇らせた。

「でも先生……人狼は人を毛嫌いしていると聞いたことがあるのですが、大丈夫なのか？」

お父さんは大きな声で豪快に笑った。

「その通りじゃ！ あいつらは人を毛嫌いしておる」

私とレオは顔を見合わせる。お互いに不安で顔がゆがんでいた。

私たちは、ぎぎぎつ、と首を回し、お父さんの顔をもう一度見た。

「じゃあ、入れないんじゃないの？」

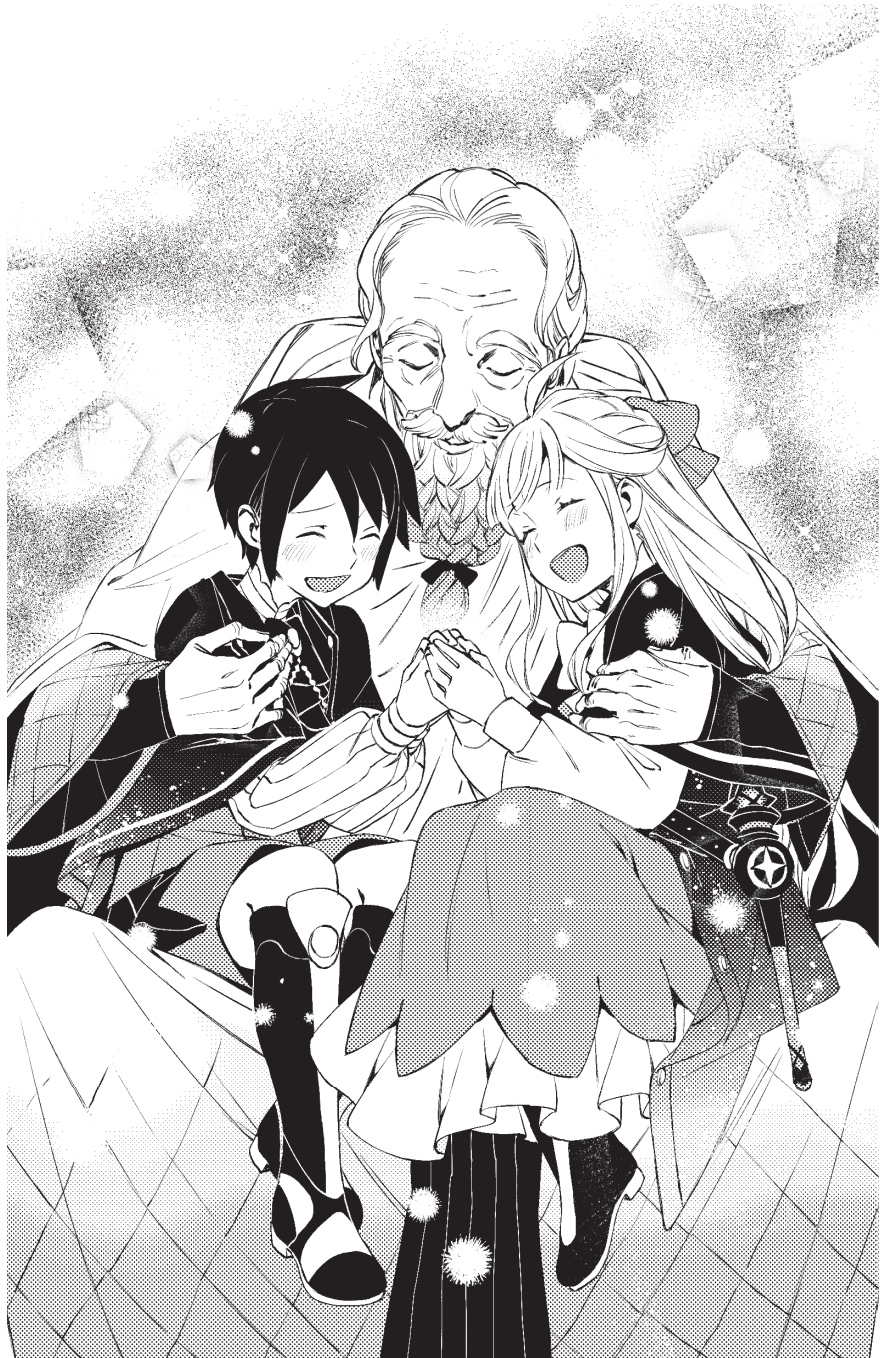
「いや、わしは入れる」

「私たちは？」

「入れてもらえないじゃろうな」

お父さんが何を言おうとしているのか察しがついたのか、レオが青ざめた。

「もしかして、入れてもらえるように、自分たちの力でどうにかしろってことですか？」  
その言葉に、私は驚いて声をあげた。



「え！ そんなの難しいよ！」

そんな私たち二人を、お父さんは優しく抱き寄せ、膝の上に乗せると言った。

「大丈夫じゃ。二人ならできる。人狼の里への道のりは修行にはもってこいなんじゃよ。きつとためになるはずじゃ」

お父さんにできると言われて、できないとは言えない。

やつとゴースト退治が終わったところなのに……と思っただけれど、魔女ダリアとの戦いを経験した私は、嫌とは言えなかった。

恐ろしいことや困った問題は、こちらの都合に合わせて来てはくれないのだ。

魔女ダリアに襲われて、私たちは運よく助かった。

でも、次はどうなるかわからない。

自分たちが頑張って、努力して強くなつて、前に進み続けるしかない。

私とレオは手をつないだ。

どんなことがあつても、二人一緒ならば頑張れる。

それに、二人一緒なら、大変なことでも笑つてできるから不思議だ。

「アルル頑張ろうね！」

「うん！ レオ頑張ろう！」

「二人とも、その意気じゃ！」

お父さんにぎゆうぎゆうと抱きしめられ、私たちは笑い声をあげた。

ドラゴニル山脈を越えた先に、人狼の里はある。

でも、その里にたどり着くためには、雪の降り積もった森を抜けなければならない。

森の中には、すべてが凍りついた、音のない銀色の世界が広がっている。

私とレオは、木々の間に隠れながら、音を立てないように息をひそめる。

吐く息が白く、キラキラと輝いた。

ふと……森の中に、小さな影が動いた。私たちはそれに気づき、身構える。

でも、ここは音のない世界。

——シャリツ。

あつ！ 足音を立ててしまった。

とても小さな音だったのに、それが聞こえた瞬間、狼の耳がピクリと動く。

狼の銀色の瞳が雪をじっと見つめ、そして遠吠えを始める。

それは、「侵入者を見つけた」という合図。

遠吠えは遠吠えを呼び、狼たちが集まり始める。

「アルだめだ、見つかった」

「狼つてすごいね！」

私とレオは、そろりそろりと音を立てずに進むことを諦め、もう音を気にせずに白銀の森を駆ける。

——グルルルア！

すぐそこで狼たちの息づかいが聞こえてくる。鋭い爪で雪の上を駆ける音が響く。

「アルル！ このままじゃ追いつかれる！」

「うん！」

「一度隠れよう！」

「分かった！ 私が目くらましの魔法をするね！」

「了解！」

私たちは背中を合わせると、杖を出し、構えた。

「光よ！」

私が狼に向かっつてまぶしい光を生み出す魔法をかけると、レオは私たちの下にある雪に向かつて魔法を放った。足元に空間が生み出され、私たちを収めると、すぐに雪でフタがされる。

レオの魔法で、私たちは雪の下へと体を隠し、息をひそめた。狼たちはその場の匂いがかいで、突然消えた私たちをしばらく探している様子だったけれど、違う場所から遠吠えが上がり、そちらの方へと駆けていった。

「行ったかな？」

「うん、行つたみたいだよ」

私たちはふうふうと大きく息を吐くと、雪の中から姿を現した。

白い服を着て、匂いを消し、少しずつバレないように進んでいたのだけれど、狼の鋭さはすごい。本当に驚かされる。

ほつとして、私たちはその場に背中合わせでべたりと座り込んだ。

空を見上げると、日は傾き始めている。

「レオ。明日の朝までに着けるかな？」

「多分ね。でも先生もひどいや」

「飛んでいければすぐなのにね」

「うん。ほうきを使つちやだめだなんて、はあ。本当に困る」

お父さんから出された課題は一つ。

二人で力を合わせて、森を抜け、人狼の里へとたどり着くこと。

ただし、ほうきを使うことは禁止。

狼たちはカンが鋭いうえに、動きが速い。

魔法を使うとすぐに気づかれるので、できるだけ使わないようにする。

そういう条件があるので、私たちは時間をかけて進むしかなかったのだ。

「とにかく頑張ろう。よいしょつと」

私は立ち上がる。そして、レオを引つ張り立ち上がらせた。

「アルルありがとう。うん。よし、行こう」

また息をひそめて進みだそうとしたその時。

……！！

どこからか、かすかに声が聞こえることに、私は気がついた。

私はレオと目を合わせると、うなずきあつて杖を構え、辺りをうかがう。

けれど雪山は静かで、きつきのような荒々しい狼の気配はなかった。

「気のせい？」

レオは杖を振った。

「耳よ音を良く拾え！」

すると、私たちの耳が大きく広がった。

かなり不格好だけど、先ほどよりも音が大きく聞こえる。

雪の落ちる音までもが私の耳に届くと――

『どうしよう……』

今度は、声はつきりと聞こえた。

私たちは顔を見合わせると、声のする方へとゆつくりと近寄っていった。

岩の後ろ側に、何かがいる……？

よくよく目をこらしてみると、白いモコモコとした生き物が何匹も集まって、岩の陰でひしめき合っていた。

『どうする？』

『どうする？』

『いやいやどうする？』

同じような言葉を繰り返しながら、くるくると回るその生き物は、今度は、びよんびよんと飛び跳ね始めた。

『どうする？』

『どうする？』

『どうしよう？』

どしん！ どしん！ と岩が大きく揺れる。

小さな体なものにもかかわらず、揺れ方も、飛び跳ねる音もどんどん大きくなっていく。

私とレオは、思わず近くにあった岩にしがみついた。

その時、白いモコモコの近くで、何かが丸まっているのがふと目に入った。

『よし決めた！』

『よし決めた！』

『雪で呑み込んじゃえ！』

何のことだろう？

モコモコの言っている意味は私には分からなかったけれど……

次の瞬間、ドラゴニル山脈に積もっていた雪が、ゴーツというすごい音とともに流れ始めた！

『くるぞー！』

『雪崩がくるぞー！』

『呑み込むぞー！』

ケタケタと笑う白いモコモコ。これは一体何なのだ？　と思いつつも、雪崩から避難するために防壁を作ろうとしたその時——白いモコモコの近くにいた丸まっていたものが、ピクリと動いた。

丸まっていたものの耳がぴよこんと動き、それがこちらを見た。

私は目が合った瞬間、弾かれたように動き、その生き物に手を伸ばし、腕の中に抱き込んだ。

「アルル！」

レオが私を追い、間髪、雪崩に巻き込まれる前に防壁を作り上げてくれた。

——ドドドドドドドオオオ……！

雪崩の勢いは凄まじく、辺り一帯がすべて雪に呑み込まれた。

レオの作ったボールの形の防壁が、雪の勢いでギシギシと軋む音が聞こえる。

レオが杖をさらに振り、呼吸を整え、防壁を強化してくれた。

「アルル、びつくりするから突然動くのやめてよ」

「ごめんレオ。でも、この子がいたから……」

私がギリギリで雪崩から助けた生き物。

それは、子犬だった。

私の腕の中で顔をあげた子犬は、きよろきよろと辺りを見回している。

とても可愛らしいけど、その瞳の雰囲気は鋭くて……ただの子犬ではないような気がして、私は首をかしげた。

「狼の子ともかなあ？」

レオも首をかしげる。

「うーん？　でも、あの狼の子にしては大人しいよねえ」

私が頭をなでようとすると……プイッと可愛い顔をそむけられた！　少しがっかりしてしまふ。

「でも、あの白いモコモコ、なんだったんだろう」

「本当にね。とにかくアルル、まずはここから抜け出さないよ」と

「うん。でも、どうしようか」

自分たちが、今どれほどたくさん雪に埋もれているのかは分からない。ここから脱出するのは、すごく大変かもしれない。

けれど、ずっとこうしてはいられないよね。

「レオ、炎を作って雪を溶かしてみようか？」

「そうだね。防御壁の外側に魔法をかけて溶かしてみよう」

私たちは杖を合わせて魔法を放つ。

「炎よ、凍てつく雪を溶かせ！」

周りの雪が溶け始め、上の方から太陽の光が見え始めた。

あと少しだ！ と思った時、突然防御壁がぐらりと揺らいだ。

「え？」

「あ」

足元を見ると、炎の魔法ですっかり雪が溶けていた。

そして、そこに地面はなく、ぼつかりと大きな穴が広がっている！

「うわあああ！」

防御壁が、穴の中へと落ちていく!!

——ドオオオオン！

穴の底に着いた！ けど、防御壁の勢いは止まらない。

この防御壁はボールのような形に作られている。

つまり、ごろごろと転がってしまふ——!?

「うわあああ！」

「目が回るう！」

しばらく転がり続け、やっと抜けた先にあったのは、広い空間。

つららのような石が天井から無数に下がっている。鍾乳洞のようだった。

石でできた壁はうつつすらと光っており、真っ暗ではないが薄暗い。

防御壁を消して、どうにか立ち上がる。

私は地面に子犬を一度下ろして、辺りを見回した。

子犬は四本の足をベタリと広げ、ぐるぐると目を回している。

「レオ……ここ……どこ？」

「土の中だよねえ。僕たちどれだけ落ちたんだろう……」

私たちは、あはは、と乾いた笑いを浮かべた。

もつとちやんと考えてから魔法を使うべきだった。

お父さんが見ていなくて良かった。きつと見ていたらため息をついただろう……

鍾乳洞は広く、声を出すともものすぐ岩にはね返り、広がって響いて聞こえた。

「とにかく出口を探さなきゃ」

「うん。行こうか」

私はもう一度子犬を抱き上げた。

「アルル、その子も連れて行くの？」

「うん。ここに置き去りにはできないでしょう？」

レオは子犬を見つめ、「両手を広げた。

「僕も抱っこしたい」

「うん。後で交代してね？ 私もまた抱っこしたいから」

子犬を渡すと、こんな状況なのにもかかわらず焦りもしない私たちに、子犬がため息をつくように息を吐いたから、私たちは笑ってしまった。

しばらく歩いていくと、行く手にうっすらと明かりが見えてきた。

出口かと思っただけで、たどりついてみれば出口ではなく、小さな水たまりがあつて、

それが青白く発光していた。

それを見た子犬は、レオの腕の中で突然暴れ出した。そして地面に飛び降りると、ふん

ふんと水の匂いをかぎ、舌でペロリと舐めた。

すると目を丸くし、よほど美味しかったのか、すごい勢いで飲み始める。

「えー。それ、飲んで大丈夫？ レオ、大丈夫かな？」

「飲まない方がいいよ！ 毒とかあるかもしれないし」

私たちは子犬を止めようとするが、子犬は止まらず、ぺちやぺちやと音を立てて水を飲み続けた。

そしてやつと飲み終えたのか、子犬はうーんと伸びをする。

「大丈夫？ びつくりした。止めようとしても暴れるし」

「うん。アルル、この子大丈夫かな？ きみ、お腹痛くない？」

するとその時、子犬が四本の足をピンと伸ばす。

さらに全身の毛が突然逆立って、私たちは慌ててしまう。

「やっぱり水に毒があつたんだよ！」

「大変だ！ 早くお医者さんに診せないと！」

次の瞬間、私たちは目を見張る。

小さかった子犬の体が、どんどんと大きく変化していく。

そして、私たちよりも大きな体になると、天を仰いで遠吠えをした。

その姿を見上げた私たちは、思わず尻もちをついてしまう。

子犬が鋭い牙を光らせ、ニヤリと笑ったのが見えた。

大きくなった子犬を見上げ、私たちは声をあげた。

「アルルすごい！ わあ！ 大きくなった！」

「可愛い！ お父さんに一緒に暮らしていいか聞いてみなぎや！」

大きい子犬も可愛いと思つただけれど……その瞳がギラギラと血走っているのを見て、

固まった。

心が警笛を鳴らす。

逃げなくちゃ危ないと私たちは気がついて、慌てて魔法の杖を構えた。

——グルルルルア！

子犬は牙と爪をむき出しにし、獣のようなうなり声をあげて、私に襲いかかってきた。

「危ない！」

ギリギリでレオが魔法でそれを防いでくれなかったら、どうなつていたか分からない。

一体何が起きたのだろうか？

突然狂暴になつてしまったことに驚いて、レオが作つてくれた防壁の中から見つめて

いると、子犬だった獣は空気を震わせるような遠吠えをし、駆け出した。

私たちは顔を見合せてうなずき合々と、走つて追いかけた。

「だめだ！ 速くて追いつけない！」

「けど、もしかしたら毒が体を巡つて凶暴化したのかも！ それなら止めなぎや！」

お父さんに、今回は人狼の里に着くまでほうきは使つてはいけないと言われている。

約束を破つてはいけないと思ひながらも、それでも、凶暴化したままの子犬を放つては

おけないと思つた。

レオも同じことを考えていたようで、私のほうを見た。私たちはお互いに目を合わせる

と、うなずき合い、杖を振つてほうきを出した。

それにまたがり、全力で子犬だつた獣を追いかけた。  
風のように速く鍾乳洞をどんどんと進む。

その先に光が見えてきた。

何の光だろう？ 近づくと、そこには巨大な魔法陣があった。それが青白く光っているのだ。

先ほど子犬が飲んだものと同じ青白い色をした水が、天井から魔法陣へと落ちる。そのたびに魔法陣は青白く光った。

子犬だつた獣がそこにいた。魔法陣の中央で、今までで一番大きい遠吠えをする。

空気が震え、耳が痛くなるほどのその声に、私たちは顔をしかめた。

あの魔法陣の形——もしかしたらここは、闇の力が封じられている場所なのかもしれない。

私たちは杖を向けた。

獣になつた子犬は、こちらをぎらつく瞳で見つめると、突進してきた。

私たちは空中でぐるりと回転してそれを避ける。

獣は壁をよじ登り、空中にいる私たちに飛びかかってきた。

「捕縛せよ！」

私が放つた魔法を、子犬が銀色の爪で弾いた。

その光景に私たちは驚きの声をあげた。

「魔法を弾けるなんて！」

「あの子犬、すごいね！」

戦っているのにもかかわらず、私たちは感心してしまっていた。

ぐるるとうなり声が聞こえる。

子犬は体を震わせると、大きく息を吸い込み、飛び上がる。

そして、地面の魔法陣に向かって力いっぱい大きく吠えた。

——ガシャン！

すると、魔法陣は幻だつたかのように粉々に砕け散った。

なんのためにあるかは分からないが、砕いていいものではない気がする……。

「アルル！ はさみうちをしてとにかく止めよう！」

「わかった！」

「絶対に助けてあげるから！」

「頑張れ！」

私とレオの息はびつたり。左右に分かれると、少し離れて杖を構えた。

「縄よ出よ！」

「つながれ！」

私とレオの間に縄が現れ、魔法の杖の先でつながる。

私たちはそのまま縄を持って子犬の周りをぐるぐると回り、その大きな体を縄でぐるぐる巻きにしていく。

子犬は暴れるけど、魔法で強化してある縄は切れない。

子犬は、まるでミノ虫のように巻かれて、その場でグネグネと跳ね回る。

よし！

私たちはほうきから飛び降りて駆け寄ると、魔法をかけた。

「体を蝕む毒よ、消え失せよ！」

子犬の体が魔法に包まれる。

苦しそうにもがき始めた子犬をレオが心配そうに見つめる。

でも、きつと苦しいのは今だけ。頑張つて！と思っていると、子犬が動きを止めた。

体から青白い湯気が上がり、毒が抜けていく。

みるみるうちに体が小さくなり、元の子犬の姿に戻った。

「よかつたああ……！」

私はほつとして、子犬の頭をなでた。

けれど、なぜか子犬は自分が元に戻ってしまったことに絶望するかのようにはうはうはとさせて、悲しげな鳴き声をあげた。

どうしてだろう？ もしかして、まだ何か起こるのかな？

私たちは最初こそほつとしたのだけど、辺りを見回して警戒した。

砕けた魔法陣には何が封じられていたのか、分からない。不安がどんどんと広がっていく。

「アルル、先生に連絡しよう」

「そうだね。何かが起こってはいけないし」

約束を破ってほうきを使ってしまったので、お父さんに怒られるかな……？ そう思うと、連絡をするのが少し気が引けるけれど、仕方がない。

その時、子犬が耳をピンと立て、嬉しそうに瞳を輝かせると大きく尻尾を振った。

背後からは、ぴちやぴちや、という音がする。

なぜか嫌な予感がして、私たちはゆつくりと子犬が見ている方を向いた。

「きやん！ きやん！」

嬉しそうにする子犬。

対して、私はこれは大変なことが起こったぞと、杖をぎゅっと握った。

私たちの見ている先には、先ほどの子犬が獣になった時よりも巨大な、真つ黒な狼がいた。

全身が闇に染まり、その瞳はほの暗くざらりと輝いている。

その大きな体をゆらゆらと揺らし、地面に足がつくと、どしんと地響きがあった。

辺りの匂いをかぐように鼻を鳴らし、口元からはだらりと舌が垂れている。

ぴちやぴちやという音は、その口元から落ちるよだれで、水たまりのように足元に広がっていた。

子犬はきやんきやんと鳴くと、嬉しそうに尻尾をふる。そして、嬉しそうにその狼の元へと駆けだした。

「だめよ！」

「危ない！」

私たちは慌てて防壁の魔法を子犬に向かって放った。

狼の黒いしつぽが長くうねりをあげて伸び、子犬を打ちつける。

防壁のおかげで、子犬は無事だった。

だが、子犬は自分が攻撃されていることを分かっているのか、狼を見上げてきやんきやんと鳴き続けている。

子犬は防壁から飛び出すと、狼の元へとまた駆け出した。

「だめだよ！ なんだ！」

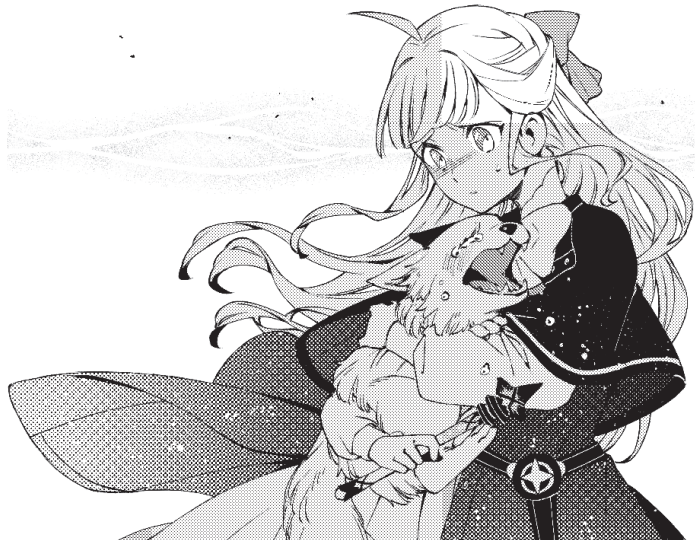
私がつきと防壁の魔法をかけなおしたけれど、今度の狼の攻撃は先ほどよりも威力が強くて、子犬は防壁ごと弾かれた。

地面に打ちつけられ、子犬の瞳が悲しみにゆがんでいく。

悲しげな鳴き声が響いてきて、私の心が痛くなった。

「だめだよ！ 行っちゃだめなんだよ！」

私は一生懸命声をかけ、子犬の体を抱き上げるけれど、私の腕の中で子犬は暴れる。傷つけられてもあの狼の元へ行こうとする。どうしてなの？



私はぎゅっと子犬を抱きしめて言った。

「行ってはだめ！」

「今、あの狼は心が闇に染まっているんだよ。危ないんだ」

子犬を説得するように声をかける。

「闇に染まっているから、あの狼に私たちの声は届かないの」

子犬は、びくりとし、動くのを止めた。

そして、その瞳からポタポタと涙をいくつもこぼす。

「あたちのせいだ」

小さな声が聞こえた。

「あたちが、言いつけを守らなかったから」

涙がとめどなく子犬の瞳からこぼれる。

それは後悔の涙のように見えた。

「おかたんが……あたちのせいで闇に染まっちゃった……」

自分のせいで、大切なものが失われてしまった悲しみの涙。

私には、子犬の気持ちがまるで心に直接ぶつかってくるかのように感じた。

「あたちが悪い子だから」

その時、なぜか次第に子犬の体が闇に染まり始めた。

「あたちが悪い子だから！」

それは心の悲鳴。私は生まれて初めて聞いた。

全身が震えるような、体から悲しみがあふれ出てくるような、そんな悲鳴だった。

子犬の心の声が、私たちの心に直接響いてくる――

――あたちは、いつも周りからできそこないって言われた。走るのも、狩りもへたくそだから。家でおかたんにぎゅってしてもらうのが好きな甘ったれたったから。



あの泉の水は少しなら大丈夫なんですよ？

だから、私はしばらくしてから部屋から抜け出して、雪の中、別の入り口を探した。

大きな入り口には見張りが立つようになったけれど、鍾乳洞は大きいから、雪の下にきつと別の入り口がある。

だから、雪ん子に頼んだの。雪崩を起こしてって。

雪崩で雪が崩れれば、雪に呑み込まれて、鍾乳洞の穴にたどり着くかもしれない。それに賭けた。

おかたんの所へ行けたから、水たまりの水をあたちは飲んだ。喉が焼けるように痛くなって、頭がぼんやりとしたけれど、おかたんを助けなきゃいけないことだけは忘れなかった。

頭の中がごちゃごちゃとして、体の自由がきかなくて、一緒にいた人間の子どもたちにも、したくないのに攻撃してしまった。

おかたんの匂いをすぐに見つけた。封印の魔法陣もあつたから壊した。

でも、中から出てきたのは、泉の水を飲み干し、闇色に染まってしまったおかたん。あたちでも分かる。もう、おかたんは助からない。

大好きなおかたん。嫌なことがあつたら、ぎゅってしてくれるの。怖いことがあつたら大丈夫よってキスしてくれるの。あなたが世界で一番愛おしいって、言ってくれるの。でも、もう聞けないの？ 笑ってくれないの？ 怒ってくれないの？ 一緒にいてくれないの？

やだ。やだよ。おかたん。

お母さん。

お願い。側にいてよ。いなくならないで。もう、悪いことしないから。人狼らしく生きるから。

おかたん……お願い……いなくならないで——

闇に染まりかけた子犬の心の叫びを聞き、その絶望を打ち消すように、私たちは力強く言った。

「大丈夫だよ」

「僕たちが、きつと助けるから」

「助けてみせるよ。だって私たち」

「偉大なる大魔法使いの弟子だからね！」

私たちは子犬を安全な場所まで移動させると、安心させるようにっこりと笑う。

そして、杖を構えた。

絶対にかしこみにさせてみる。そう決めて、立ち上がった。

「アルル、あの獣は完全に闇に囚われているよ」

「うん。でも、さつき子犬を助けたときに分かったこともあったね」

「ああ。じゃあ最初は？」

「捕まえて、毒素を抜いてからだね！」

「おっけい！」

誰かの心が闇に染まってしまった時、どうしたらいいのか。

私たちはお父さんに教えてもらった。

まずは今なにか起きているかをしっかりとつかむこと、それから原因を探っていく。

何が本当の原因なのかで対応はさまざま。だからこそ観察は重要なんだ、と。

私たちはほろほろにまたがり飛び上がると、子犬の時と同じように、まずは捕まえようと

魔法で縄を出した。

しかし……近寄ってみて、子犬との違いを感じた。

子犬の倍以上ある体。

これを自分たちの力で抑えられるのかな……？

それでもやらなければ！と、気持ちをふるい立たせて縄を伸ばす。

しかし、獣は高く飛び上がると天井を蹴り、そして大きく吠えた。

吠え声とともに、衝撃波がこちらに向かってくる！

——ドンッ！

ギリギリで避けるが、強い風の勢いに弾かれて吹き飛ばされ、壁にぶつかってしまった。

いてて……と、どうにか立ち上がった時、獣は反対の方向に向けて駆け出した。

まずい。外に逃げられれば、どんな被害が出るかわからない。

私たちは必死で獣を追った。

「捕縛せよ！」

「体を蝕む毒よ、消え失せよ！」

魔法を連続して放つけれど、獣が速すぎて当たらない。

これではいけない。私たちは頭の位置を低くしてスピードを上げる。

どうにか鍾乳洞内で決着をつけたかったけれど、獣の向かう先にはキラキラとした外の光が見える。

出口の光が雪を反射して、さらにまぶしく見えた。

「間に合わない！」

「あ！ レオ！ 見て！」

出口の所に、見慣れた人影が見える。

私たちは笑った。

「お父さん！」

「先生！」

お父さんが杖を空に向かって構えて、魔法を放つ。

「閉じ込めよ！」

次の瞬間、まぶしい光が消え失せ、出口が消えた。

そして耳元で、お父さんの声が聞こえた。

『アルル、レオ。聞こえるか？』

「お父さん？」

「先生？ はい、聞こえます」

『出口をふさいで悪かったの。だが、そやつのもとう毒は、太陽の光によって霧のようになり、空気に混ざって広がって、人々に害をもたらすのじゃ。だから外に出してはならん！』  
私たちはそのことに驚き、うなずいた。

『二人でどうにかできそうかの？』

真剣なその声に、私たちは笑みを浮かべるとうなずいた。

「もちろん！」

「任せてください！」

『わしは、人狼の里にわずかに漏れ出た毒を消しておくからな。無理せず、だめだと思つたら連絡しなさい』

「はいー！」

私たちが元氣よく返事をする、お父さんの声は聞こえなくなつた。

お父さんが私たちに任せるといふことは、きつと頑張ればできる、ということだ。

よし！ 頑張ろう！

いらだち、うなり声を上げる獣を正面から見つめ、私たちは杖を構えた。

あんなに小さな子犬が泣いていた。

これで助けられなければ、偉大なる大魔法使いの弟子とは言えないでしょう！  
今度こそ捕まえてみせる。

私たちは、目配せしあうとうなずき、弾けるように一気にスピードを上げ、左右に飛んだ。

子犬の大事なお母さんにケガはさせられない。

「クモの巣よ広がれ！」

私たちは、自分たちの後ろの道をクモの巣でふさいだ。

そして、クモの糸を獣に向かっっていくつも放つ。

獣はべたべたしたクモの糸に触れないように軽やかに避けていくが、逃げ場はどんどん狭くなっていく。

それに気がついた獣は、近くを飛び回る私に向かつて攻撃を仕掛けてくる。

飛びかかられ、すんでの所で避けるが、獣はその鋭い爪で岩を砕いて飛ばしてくる。

岩がほうきにぶつかり、落ちる！……と思ったが、レオが手をつかんで助けてくれた。

私は、反動をつけてレオのほうきの後ろにまたがった。

「ありがとうレオ！」

「うん。でもアルルが獣を引きつけてくれたおかげで、準備はバツチりだよ」

獣が私に攻撃を仕掛けようと飛び上がった瞬間に、レオは地面全体にクモの巣を張っていた。

着地した獣の足にはクモの巣が絡みつき、動けなくなってもがいている。

私たちは杖を構え、魔法を放つ。

「クモの巣よ広がり、囲みこめ！」

またたく間にクモの巣が広がっていき、獣を包み込んだ。

獣はもがくが、完全にクモの巣に絡みつかれ、抜け出せない。

私たちは獣の近くへ行くと、まずは毒を打ち消す魔法をかける。

「体を蝕む毒よ、消え去れ！」

すると獣の体から青白い光の湯気が上がり、毒が消えていく。

それと同時に、巨大化した体は小さくなっていくが、それでも私たちよりずっと大きい。

先ほどまで荒れ狂うようにギラついていた瞳は、毒が抜けたことよってなのか、今は

闇色にほの暗く揺らめくだけ。

立ち読みサンプルは  
ここまで

毒を抜いてもなお、その体は闇に囚われていた。

闇に囚われてしまったものは、心を喰われる。

長い時間闇に囚われれば囚われるほど、心が喰われ、壊れていく。そして意思を失う。

意思を失ったものは、さらに闇を求める。

私たちはそうお父さんから学んでいた。

獣の瞳は闇に染まり、まだそこには意思は感じられない。

「アルル」

「うん。このままじゃだめだね」

私たちは、地面にあるクモの巣を消し、杖で獣を中心に魔法陣を描いていく。

この魔法陣は、闇に囚われた者の心に潜り込むために必要なもの。

ただ、お父さんには闇に囚われた者の意思を取り戻すことはとても難しいと教わった。

闇は心を壊すので、普通の魔法使いでは対抗しようとしても闇に吞まれてしまう。

けれど、私たちのように黒い杖に選ばれた闇の魔法の使い手なら、闇の力に呑み込まれ

にくい。だから、助け出せる可能性があるのだと。

私たちが頑張れば、子犬のお母さんを助け出せる。

魔法陣を描き終わると、私たちは額から流れる汗をぬぐい、大きく息を吐いた。

その時、子犬がこちらに走ってくるのが見えた。

お母さんだった獣の姿を見て震え、魔法陣のそばで止まると、私たちを見上げた。

私たちは、につこりと子犬に満面の笑みを向ける。

この魔法は、たとえ黒い杖に選ばれた闇の魔法の使い手でも、闇に囚われる危険を伴う。

物事において「絶対大丈夫」ということはないのだ。

だからこそ、笑顔を忘れない。

闇に対抗するのは、笑顔。

「助けるからね」

「あと少しだけ、待っていてね」

『うん……うん！』

子犬の瞳には涙があふれている。

その涙を止められるのは、私たちだけなんだから。